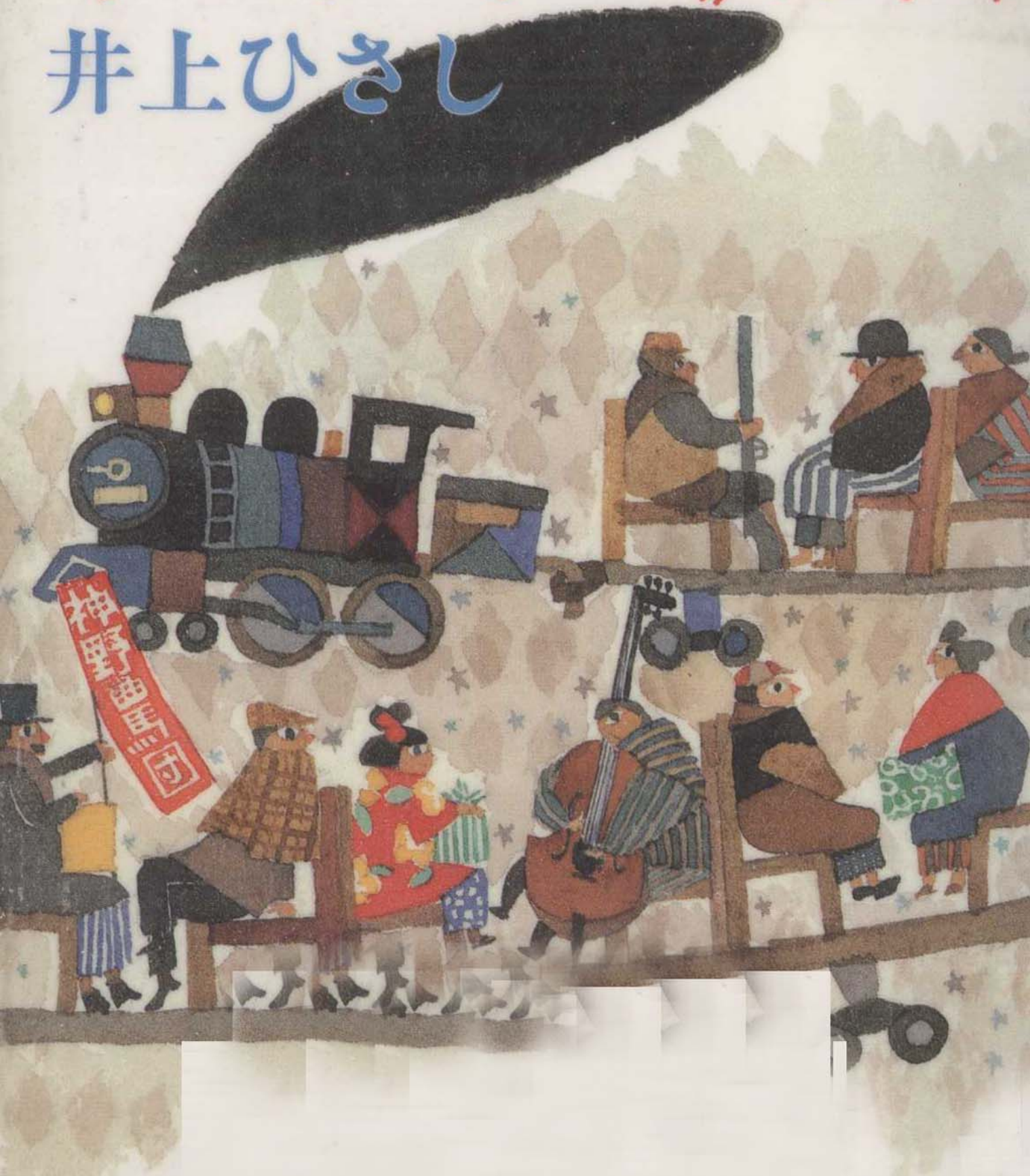
イーハトーボの劇列車

井上ひさし



新潮文

イーハトーボの劇列車

新潮文庫　い－14－20

昭和六十三年一月十五日　印刷
昭和六十三年一月二十五日　発行

著者　井上ひさし
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六－五一一一
編集部(〇三)二六六－五四四〇
振替東京四－八〇八番
定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・大日本印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社
© Hisashi Inoue 1980 Printed in Japan

ISBN4-10-116820-2 C0193

新潮文庫

イーハトーボの劇列車

井上ひさし著

新潮社版

目次

前口上……七
イーハトーボの劇列車……一三
賢治と啄木に聞く……一六九
解説　扇田昭彦

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

イーハトーボの劇列車

前

口

上

これからの人間はこうであるべきだという手本。その見本のひとつが宮沢賢治だという気がしてなりません。必要以上に賢治を持ちあげるのは避けなければなりませんが、どうしてもそんな気がしてならないのです。

賢治は科学者でした。けれども科学が独走するとろくなことにはなりません。そのことはどなたもよくごぞんじです。科学がはしゃぎたてるのをだれかがいましめなければなりません。賢治のなかで、その役目をはたしたのは宗教者としての部分でした。

この関係は逆にしても成り立ちます。宗教だけにこりかたまると独善の権化のようになってしまいます。そこで宗教者としての部分を客観的にみて、かたよったところを改めるために科学的精神を活用するわけです。科学と宗教とは、大雑把にいってしまえば、それぞれ反対の方角を目ざしています。どちらへ行きすぎてもよくない結果がうまれます。ところが賢治のなかでは、このふたつのものがたがいのお目付役をつとめていたように思われます。そしてこのふたつのものの中間に、文学がありました。

三者のこの関係をわたしは忘れないようにしたいとねがっています。

それから賢治は、人間は多面体として生きる方がよろしいと説いているようにみえます。

野に立つ農夫も四六時中、農夫であってはつまらない。それでは人間として半端である。朝は宗教者、夕べは科学者、夜は芸能者、そういう農夫がいてよいのではないか。賢治はそう考えて羅須地人協会をはじめたのではないか。たぶん、賢治の頭のなかにはバリ島民の生き方が去来していたと思われます。ごぞんじのように、バリ島民は、農夫、芸能者、宗教者の一人三役をこなしています。これに「科学者として」を加えて一人四役。これがよりよい人間のあり方だと彼は信じていたのではないか。ちなみに賢治の時代にも、世界的な規模でバリ島ブームがおきています。海外の情報に敏感な彼のことですから、バリ島民の多面的な生き方について、おおよそは知っていただろうと思われます。

科学も宗教も労働も芸能もみんな大切なもの。けれどもそれらを、それぞれが手分けして受け持つのではなんにもならない。一人がこの四者を、自分という小宇宙のなかで競い合せることが重要だ。賢治全集に勝手きままな補助線を引いて、彼の思い残したものをわたしなりに受け継ぐならば、右のようなことになるのではないかと思います。あらゆる意味で、できるだけ自給自足せよ。それが成ってはじめて、他と共生できるのだよ。そうしないと、科学が、宗教が、労働が、あるいは芸能が独走して、ひどいことになってしまうよ。賢治がそう云っているような気がしてなりません。

（季刊「the 座」第六号、昭和六十一年三月）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

イーハトーボの劇列車

登場人物

宮沢賢治
宮沢政次郎（父）
宮沢イチ（母）
宮沢とし子（妹）
福地第一郎（三菱社員）
福地ケイ子（第一郎の妹）
西根山の山男
なめとこ山の熊撃ち淵沢三十郎
人買いの神野仁吉（曲馬団団長）
人買いに売られた娘
風の又三郎らしき少年
背の高い、赤い帽子の車掌
稲垣未亡人
伊藤儀一郎
女車掌ネリ

1　農民たちによる注文の多い序景

〔笠に蓑に草鞋〕〔継布だらけの、剣道稽古衣のような野良着、色のあせた紺股引、冷飯草履〕〔つんつるてんの古背広上下にゴム長靴〕〔洗い晒しの襟なし木綿シャツ、黄色い作業ズボン、地下足袋〕〔ポロシャツにジーンズ、踵を潰したスニーカー〕……思い思いの出立ち、身なりの農民たちが、それぞれの装いに釣り合った旅荷物を持って、きれいな青空の下、すきとおった風のなかに立っている。

やがて農民たちは次の序詞を、「新劇風シュプレッヒコール」からはもっとも遠い語り口や物言いで、声を揃えて、あるいはてんでんばらばらに語る。ひょっとしたら彼等は歌うかもしれない。

わたくしたちはホテルのりっぱな料理店へ行かないでも、きれいにすきとおった風をた

べることができます。コカコーラの自動販売機なぞなくとも、桃いろのうつくしい朝の日光をのむことができます。

またわたくしたちは、たんぼやはたけや森の中で、仲間のひどいぼろぼろのきものが、いちばんすばらしいびろーどや羅紗やカシミヤやイッセイミヤケやハナエモリのきものにかわっているのをたびたび見ました。

わたくしたちは、そういうきれいなたべものやきものがすきでした。……でした。

これからのわたくしたちのおはなしは、みんな林や野原や鉄道線路やらで、虹や月あかりからもらってきたのです。それから筑摩書房発行の宮沢賢治全集全十四巻のなかからもらってきたのです。ほんとうにかしわばやしの青い夕方をひとりで通りかかったり、十一月の山の風のなかにふるえながら立ったり、農協の図書室の石油ストーブのそばで宮沢賢治全集の頁をめくったりしていますと、もうどうしてもそんな気がしてしかたがないのです。ほんとうにもう、どうしてもこんなことがあるようでしかたがないということを、村から、この世から旅立つ最後の仕事として、こうして劇に仕組んだまでです。

ですから、これからのおはなしのなかには、お客様のためになるところもあるでしょうし、ただそれっきりのところもあるでしょうが、わたくしたちには、そのみわけがよく

つきません。なんのことだか、わけのわからないところもあるでしょうが、そんなところは、わたくしたちにもまた、わけがわからないのです。

けれども、わたくしたちは、これからのおはなしのところどころが、お客様のために、すきとおったほんとうのたべものになることを、どんなにねがうかわかりません。

そしてわたくしたちのためには、これからのおはなしはみんな、長い旅のあいだのビスケットになるでしょう。

空はりんごのいい匂いでいっぱいです。これはいま、西の空に沈んだばかりの赤いお日様が吐いた匂いなのです。

語り終えて農民たちは、冴え冴えしていて何か笑っているようにさえみえる。なお、賢治の作品においては、死んですぐの者は常に「冴え冴えして何か笑って」（たとえば『なめとこ山の熊』『よだかの星』）いることになっている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com